＜前回＞宗教批判の系譜１――フォイエルバッハ

１．現代キリスト教を規定する問いとしてのフォイエルバッハ問題
　　フォイエルバッハの宗教批判は避けて通れない
　源泉は古代ギリシアの哲学的神話批判、人間が想像した神・神人同型論
　　→マルクス、ニーチェ、フロイト、キルケゴール

２．フォイエルバッハの宗教批判の二つの前提
　①人間の類的本質の無限性
　②類的本質の外化（＝表現、疎外、投影）

８．バーガー、ルックマンの知識社会学：
　　外化（表現・創造）→客体化（制度化・実体化）→内化（社会化・自己同一性）

９．「他者は私の汝であり……私の他なる自我である。それは私にとって対象化された人間、私の顕わにされた内面である。すなわち他者は自分自身を見る目である。私は他者においてはじめて人間性の意識をもつ。他者を通してはじめて、私は私が人間であることを経験し感じるのである」「孤独は思想家の欲求であり、共同は心情の欲求である。人は一人で考えることができるが､愛することができるのはもっぱら二人でなのである。愛においてわれわれは他者に依存している｡」（上 163）
　　↓
　　我と汝、対話的思考

10.「宗教は無限者の意識である。したがって宗教は人間が自らの無限の本質についてもつ意識であり、かつそれ以外の何ものでも在り得ない」。「神の意識は人間の自己意識であり、神認識は人間の自己認識である」

11.「神は人間の鏡である」、「神学の秘密は人間学である」

13. 哲学の課題：このような神と人間の対立が類的本質としての人間と個人としての人間の対立であることを暴露することであり、人間から疎外された人間性を人間の側に取り戻すことなのである

14. 宗教批判（疎外克服のプロセス）は宗教自体に内在するメカニズムである。
　　先行する宗教への批判は、当初は無神論とされた。

15. 批判的コメント
　①フォイエルバッハによって批判された神
　　人間の無限の類的本質が人間と対立するものとして人間の外に投影されたもの
　　→人間は無限な自らの本体的人間性の実現を妨げられる、人間のエゴイスティクな幸福衝動の素朴な実体化
　　最高存在あるいは最高価値として措定された神（形而上学的存在者としての神）
　　バルト「フォイエルバッハの鋭い感覚は正しい」
　　「神――少なくとも宗教の神――に対する信仰が失われて行くのはただ、懐疑論・汎神論・唯物論の場合がそうであるように人間――少なくとも宗教において認められているような人間――に対する信仰が失われるところにおいてだけである」、「人間を否認することは宗教を否認することである。」（122）
　　宗教で問われているのは人間であり、この連関を主題的に取り上げたのがフォイエルバッハである（議論はカント・シュライアマハーに発端をもつ）。
　②人間の類的本質の無限性の根拠
　　「個別的には人間の力は制限されているが、結合されると無限の力となる。個々人の知は制限されているが、理性は制限されておらず、学も制限されていない。なぜなら、それは人類の共同行為だからである」

→近代人の「信仰」（無限の進歩）＝楽観主義・ヒューマニズム

③現代の宗教的神学的思想は人間の疎外の克服、人間の本来的可能性の実現についてどのように考え、どのように答えているのか

→「投影のメカニズム＝人間の本性」ならば、フィクション機能の積極的意味こそが問われるべきである（ユートピア精神の意義）

④フォイルバッハの宗教批判→マルクス的な無神論的な宗教批判（非宗教的宗教批判）

→キルケゴール的な有神論的な宗教批判（宗教的宗教批判）

11．宗教批判の系譜２――マルクス

１．マルクスの宗教批判

①人間社会に宗教が生じたのは単なる偶然ではない。宗教は欲求の疎外形態における実現（否定的な媒体）であり、人間の現実生活の一契機なのである。

・唯物史観：生産力と生産関係の矛盾の弁証法的展開

・上部構造と下部構造

・個人と共同体

②宗教批判と政治社会批判とは密接に関連

「ドイツにとって宗教の批判は本質的にもう終わっている。そして、宗教の批判は、あらゆる批判の前提である。天上の批判は、こうして地上の批判にかわり、宗教の批判は法の批判に、神学の批判は政治の批判にかわる」（『ヘーゲル法哲学批判序説』）

・フォイエルバッハの議論の歴史的実質化

③宗教は人間社会の歴史において必然的に生じたものであるが、その歴史的条件が変化するとき、必然的に終焉を迎えるはずである。

・積極的批判と自動的消滅待望。

・宗教はアヘンである。

④宗教を不可欠の契機として含まないような現実世界の構築

共産主義社会：非疎外形態における欲求・類的本質の実現→これ自体がユートピアか？

無階級社会

自己止揚・自己否定の契機をマルクス主義は内部に組み込んでいるか？

＜ヨハネ黙示論２１章＞

22　わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが神殿だからである。23　この都には、それを照らす太陽も月も、必要ではない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。

２．ジジェク：ラカン派マルクス主義。

「史的唯物論的分析」、「宗教が、もはや特定の文化的生活形態に完全に組み込まれたり、それと同一化したりするのではなく、自律性を獲得し、その結果、様々な文化にまたがる同じひとつの宗教として生き残ることができるような社会体制――これは、近代のありうべき定義のひとつである。」(8)

「このグローバル体制において、宗教画に担いうる役割は二つある。治療的役割と批判的役割である」(9)

「問題は、近代という＜理性＞の時代において、宗教は社会を有機的にまとめるというこの機能をもはや果たすことができない、ということである。今日、宗教がこの力を失い、

もはやそれを取り戻すことができないのは、科学者や哲学者のせいだけではない。「普通の」人々という大きな集団のせいでもある」(11)
「キリスト教の転覆力を秘めた核は唯物論アプローチによっても理解できる、ということではない。わたしのテーゼは、それよりもはるかに過激である。つまり、この核は、唯物論的アプローチによってしか理解できない――そして後者は前者によってしか理解できない――ということである。真の弁証法的唯物論者になるためには、キリスト教的な経験を経るべきなのだ。」(13)
↓
キリスト教思想とマルクス主義の新しい関係構築の可能性、宗教社会主義論の再開。
３．リクールのイデオロギー論：イデオロギーの三つの次元
・現実の転倒としてのイデオロギー（マルクス）
・正統化としてのイデオロギー（ウェーバー）
正統化の主張と信仰
・象徴的統合化、自己同一性としてのイデオロギー（ギアーツ）
象徴体系によって行動は媒介される。行動は意味の了解を前提とする。世界を理解し行動するには意味世界をイメージにもたらす象徴体系を前提とする。
現実（集団と個人の）を保持するイメージ、社会的行動を律する秩序形式を保持する構想力
↓
保守的効能
４．やや抽象的な議論になりますが、以上のように、「合理と超合理」と「批判と形成」の二つの軸によってプロテスタント原理は構造化され、ここから次の四つの契機が提示されることになります。すなわち、合理的批判、合理的形成、超合理的批判、超合理的形成です。この四つの契機によって、キリスト教思想と科学技術との関係を描いて見ようというのが、わたくしのこれから話の要点になります。
まず合理的批判ですが、これについては、歪曲としてのイデオロギーに対する批判、たとえばマルクス主義による資本主義批判が実例として挙げられます。現実を歪曲化して覆い隠すようなイデオロギーの作用を、社会科学の力によって批判的に解体して解明する、これが合理的批判であって、わたくしの話の最初に述べたような、1950 年代の原発の導入が一体どういう経緯だったのかを明らかにすることも、歪曲としてのイデオロギーに対する批判の一環にほかなりません。合理的批判は、現代の科学技術を論じる上で、きわめて重要な役割を果たすものと言えます。
このように、一定の合理的理論に基づいてなされる合理的批判の活動は、科学技術の現実を規定する歪曲に対処する上で重要なものでありますが、ではこの合理的批判を可能にしているものは何なのでしょうか。リクールは、『イデオロギーとユートピア』（新曜社）という講義の中で、マルクス主義的なイデオロギー批判の基盤を掘りさげる作業を行っています。それによれば、現実を歪曲し批判されるべきイデオロギー自体が、その基層に自己同一性としてのイデオロギーをもっており、現実を歪曲するにせよ、それを批判するにせよ、それは、その歪曲や批判を遂行する自己同一性を有する存在者（個人あるいは共同体）を前提にしなければならないのです。先に合理的批判について、それが合理的理論に基づいてなされると述べましたが、この理論を構築する前提となるのが、自己同一性としてのイデオロギーとして問われているものなのです。この自己同一性としてのイデオロギーは、ティリッヒの用語で言えば、合理的形成に対応させることができるでしょう。すなわち、合理的形成は、合理的批判がなされる基盤・前提であり、やや正確さを欠く言い方になりますが、リクールがイデオロギー論で批判としてのイデオロギーの基層に見出した

自己同一性としてのイデオロギーに関係づけてよいと思います。

＜参考文献＞

１．マルクス・コレクション（筑摩書房）
・『デモクリオトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異、ヘーゲル法哲学批判・序説、ユダヤ人問題によせて、経済学・哲学草稿』
・『ドイツ・イデオロギー（抄）、哲学の貧困、コミュニスト宣言』
２．岩波文庫
・『ユダヤ人問題によせて、ヘーゲル法哲学批判序説』（城塚登訳）
・『経済学・哲学草稿』（城塚登・田中吉六訳）
・『ドイツ・イデオロギー』（三木清訳）、『ドイツ・イデオロギー』（古在由重訳）
・『新編輯版　ドイツ・イデオロギー』（廣松渉編訳、小林昌人補訳）
３．レーヴィット　『ヘーゲルからニーチェへ』岩波書店。
４．都留重人　『マルクス』講談社。
５．津田雅夫　『マルクスの宗教批判』柏書房。
６．スラヴォイ・ジジェク『操り人形と小人　キリスト教の倒錯的な核』青土社。
７．リクール『イデオロギーとユートピア』新曜社。